

第 7 講：5 「流れる水も同じこと」

『逸話篇』に集められた逸話 200 編のうち、文久・元治より前のものは 6 編に過ぎない。取り上げる逸話はその 1 つである。

5 「流れる水も同じこと」

教祖が、梅谷四郎兵衛にお聞かせ下されたお言葉に、

「私は、夢中になっていましたら、『流れる水も同じこと、低い所へ落ち込め、落ち込め。表門構え玄関造りでは救われん。貧乏せ、貧乏せ。』と、仰っしゃりました。」と。

この逸話は極めて短いが、2 つの場面が含まれている。1 つは、「私（教祖）が夢中になっていましたら、（神様が）仰っしゃりました」という場面 A と、「教祖が、（場面 A について）梅谷四郎兵衛にお聞かせになった」という場面 B とである。

場面 A は、いつ、どこで

場面 A は、いつのことなのか、逸話からは不明である。しかし、『教祖伝』第 3 章「みちすがら」は「貧に落ち切れ」との急き込みで始まっている。逸話 5 はこれに対応するものである。したがって、天保 9 年 10 月から間もない頃のことであろう。史実校訂本（中一）考十四「貧乏せよ」に集められた史料には、天保 9 年・10 年あたりの年次が見られる。

また、明治 19 年の『最初之由来』には、「神ハをりへ御降りありて、『何でも彼でも家財を人に施せ』といひ」とある。初代真柱の書かれた「稿本教祖様御伝」にも、「刻限々々ニテ」との記述が見られる。場面 A のようなことは、一度ではなく繰り返しあったことのように見える。

場所は、どこであろうか。内蔵について『教祖伝』には記述がないが、『逸話篇』の逸話 3 には、天保 9 年 10 月から間もない頃に内蔵に籠もられるようになり、3 年間続いたと述べられている。この逸話 3 には、内蔵の事とともに、「お息」のことも書かれているが、初代真柱の 2 つの手記と比べてみると、明治 31 年の「稿本教祖様御伝」にある「お息」についての記述と、明治 40 年の「教祖様御伝」にある内蔵の記述が合体した形になっていることが分かる。そこで「教祖様御伝」を見ると、「教祖神憑りありてより十日も経たざるに」と内蔵に籠もられるようになった日時について記されている。

なお、蔵と聞くと、現在の私たちは、庭に立つ土蔵とその中に入っている古道具をイメージするが、これは庭蔵であり内蔵ではない。内蔵は、母屋からそのまま草履や下駄を履かないで行くことができる蔵である。そこは、家の中で最も貴重な物が納められるところである。場合によっては、畳を敷き、座敷として使う場合もある。ただし、『おやしき変遷史図』には庭蔵が 3 つ並んで描かれているが、内蔵は見当たらないので、天保頃の中山家のどこに内蔵があったかは不明である。

ところで、この場面 A における教祖のご様子について、教祖自身は「夢中になっていた」と梅谷に話されている。広辞苑は、夢中に対して、「①夢を見ている間。夢の中。夢裡。②自覚を失うこと。我を忘れること。③物事に熱中して我を忘れること。」の 3 つをあげているが、その②に近い意味であろう。

初代真柱の「稿本教祖様御伝」には、天保 9 年 10 月 26 日に関して、「三昼夜夢中ニ御ナリナサレ」と書かれている。辻忠作の手記『教祖伝』にも「(明治 31 年の) 六十一年以前に、

十月廿四日から、初めて教祖様に幣を持たせ、両手で持って祈禱せられたに忽ち荒立ち、幣の其紙飛んで了ひ、手怪我をなされまして（…）それより廿四、五日六日と三日間、夢中になりなされたが、…」とある。夢中は、いわゆる神憑りを指している。

明治 19 年の最後の御苦勞の時「或日警察ニて神憑りありたり」と「教祖様御伝」には書かれている。教祖は、月日のやしろとなられた後も、ごく普通のご様子の時と、神憑りと見えるような時とがあつたのであろう。教祖が、場面 A において「私は、夢中になっていましたら」と言われているのは、この神憑りのような状態を指しているように思われる。「仰っしゃりました」というのは、こうした状態で神様の言葉を聞いたと言われているのであろう。

このように見てくると、場面 A は、立教直後の内蔵にこもっておられる頃に繰り返しあったことで、夢中の状態で神様の言葉が耳に聞こえると内蔵から出てきて施しをされ、また内蔵にこもられるということが繰り返されたのかもしれない。

場面 B は、いつ、どこで

場面 B については、いつあったことなのか。当然、梅谷の入信以後、教祖が現身を隠されるまでの間である。しかし、梅谷が教祖と直接お話をすることを許されたのは、逸話篇の 105 「蔭膳」によれば、入信から 1 年 9 カ月ほど経った明治 15 年 11 月 10 日以降になる。また、場面 B の場所については、教祖が中南の門屋から御休息所へ移られたのは、明治 16 年陰暦 10 月 26 日であるから、中南の門屋であった可能性も、御休息所であった可能性もある。

御休息所について、教祖は「休息所とも言へば遊び場所とも言ふで」と言われたという（「永尾芳枝祖母口述記」（『復元』第 3 号所収）。『逸話篇』には、梅谷が教祖から聞かせてもらったお言葉が、逸話 159 や 170 に出ているが、逸話の順番からすると、明治 17～18 年頃のことのようである。個人的には、場面 B も、遊び場とも言われた御休息所でのゆったりとした雰囲気の中で、明治 17～18 年の間にあったことだと考えてみたい。

一寸ほのかに

教祖が、40 年以上の昔を回想して、場面 A について梅谷に話されたのは、「梅谷さん、お前さんも貧乏しなさいよ」と言うためなのか。そうではないであろう。では、この道は容易に付いた道でない、ということをしみじみと感じさせるためであろうか。あるいは、「おさしづ」に「新しい者は結構だけ知って居る。話聞いたゞけで現場分からん」（明治 33 年 9 月 14 日夜 9 時 刻限の御話）とある。道が大きくなると人間は慢心しがちであるが、そうしたことをいましめるためであろうか。

苦勞話は、くどくどとするよりも、さらっと行くのがよい。教祖も、次の「おさしづ」にあるように、一寸ほのかに覚えておくようにということで聞かせられたのではないであろうか。

元々は難渋でなかったけれども、有る物もやっつて了うた。難儀不自由からやなげにや人の難儀不自由は分からん。一寸ほのかに覚えて居にゃならん。（明治 23 年 6 月 12 日午後 6 時 梶本松治郎身上伺）